

ライマン雑記(11)

副見 恭子¹⁾

北海道地質測量調査 II

1. 果てしない太平洋・大津(8月5日)―根室(8月20日)

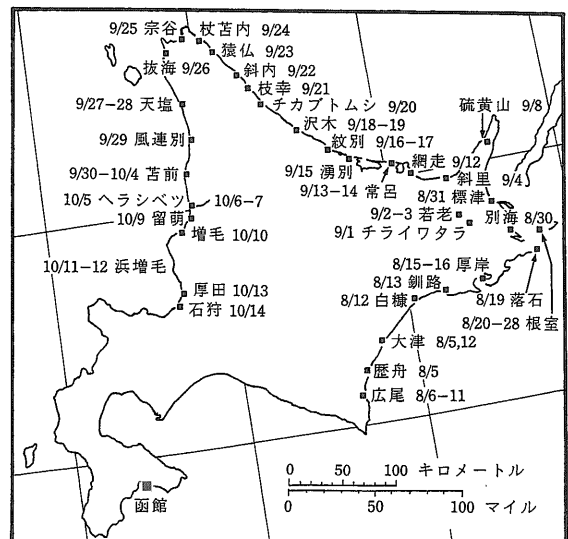
明治7年8月5日, 残りのアイヌグループは, 広尾・浦河経由で帰途につき, 通訳は札幌へ立ち, ライマンと秋山の一行は, 少し遅れて, 9時45分に, 馬で十勝海岸に沿い南下した. 茫々たる太平洋を望みながら, 段丘が多い道を駆馳し, 1時12分, Tobui(当縁)の朽ち果てた本陣(番屋? 著者注)を通過し, 1時半過ぎ, 前年榎本武揚が訪れた Ayoshuma(相保島?)川口にある砂金地に立ち寄り, 3時14分, Berufune(歴舟)本陣に到着した(第1図).

アイヌの家が2,3軒あるのみの歴舟コタンで一泊し, 翌6日, 7時過ぎ出発し, これも砂金で知られた楽古を通して, 10時30分, 広尾本陣入りした. Berōは, 大津と比べ, 開拓使の出先機関があるだけに, 役人の宿舎, 旅館, 日本人住居1軒, アイヌ住居45軒が建ち, にぎやかであった. 十勝州知事 Sakai(フィールドブックでは tsumeai・詰合とある)が, 自分で作成した地図を持参してライマンを訪問, 彼の十勝・佐幌・空知・浦河・夕張上流等の踏査を語った. 早速略図を借り受け, 大津へ戻るまでに, 秋山と野村とでコピーを仕上げた. ライマンは, 6日間マンローを空しく待ったが, いたし方なく, 彼に指令を残して, 11日に広尾を去った. 両者の不和は周知の事実で, 常に行き違いやコミュニケーションの齟齬が生じている. これも一例でなかろうか?

大津への帰路, 突然歴舟川の水かさが増し, 一瞬に褐色の泥水が急流と化し, あちこちに流木が浮ぶ異変に遭遇した. ライマン一行は, 危険を感じ, カ

ヌーで川を渡った. 西南の風が吹くと, 歴舟川が氾濫する異常現象は有名である. 当緑川, 湧洞川を経て, 無事6時に大津へ帰着した.

8月12日, 7時30分, いよいよ根室への旅が始まった. 十勝太を背後にし, 高さ60フィートの出鼻にかかると, ライマンは, Sakai 知事の地図にある, 小人が掘ったとアイヌが信じる穴居跡が近くに存在するのを思い出した. しかし, 彼は, 地図が秋山の荷物の中にあっただけでもあり, 別段探査することなく, 急ぎ通過した. コロボックルの旧居では, と興味を抱く人がいるであろう. 小人村の位置は, 現在の浦幌と推察される. 12時過ぎに, 小さな村, 尺別で昼食をとった. この尺別から厚岸までの沿岸25里余りの間に散らばる煤田を釧路煤田と呼んだ. やがて4時55分白糠に達した. 石狩十勝の旅と異なり, 今回は騎馬旅なので, スケッチは記憶に留めて, 記録は主に宿で書かれた.



第1図 ライマン調査路(大津―広尾―大津―函館)

1) マサチューセッツ大学図書館ライマンコレクション委員:
8 Eaton Court, Amherst MA 01002, U.S.A.

キーワード: ライマン, 北海道地質測量調査

清潔な白糠本陣の主人は、60代でしかも役人上り、白糠から雌阿寒への荒廃した旧道、温泉、斜里・網走等の道程に精通しているだけでなく、^{舌辛}に本陣、^{徹別}には休憩所、^{飽別}に本陣があること等、宿に関する情報にも精通していた。ここで情報収集に大いに努めた。

翌朝7時30分白糠を出立。釧路まで18 1/4 マイルの道すがら、ライマンは、炭質頁岩や砂岩、炭塊を見つけると馬を止め、また、しばしば遺棄された旧炭坑の内部を調査した。堅い平坦な砂浜に出ると、彼は馬を疾駆した。間もなく、釧路の家並、港に浮ぶ数そうのジャンク、余念なく昆布を捨てる人々が視界に入ってきた。本陣に11時50分到着。昼食後、雨となったが、半日をここでも貴重な情報の入手に過ごした。本陣主人の旅情報は厚岸まで、「それ以東の案内は、厚岸で聞くのが一番だ」との助言に、未だ情報の発達していない社会を感じ、思わず微笑んだ。今回は、地質情報も獲得できた。釧路炭田の話は勿論、Matsuneboriの硫黄、西別の火山岩等の標本も見ることができた。特に、ライマンの注目を引いたのは、粘土のようにねばねばしたクッチャロ産の明るい黄色の鉱物であった。水中に入れると浮上するが、すぐジュジュと音をたてて水を吸い、沈下する。鹿が好み、アイヌも食べる。ライマンは、海泡石であろうと記している。夜になっても雨は止まず、話に益々花が咲き、昆布、鱈、鮭の産出や蝦夷盛衰の話に聞き入った。

翌14日、先ず知人^{しんと}に寄り、^{はるとり}春採炭鉱へ。ここで、釧路本陣主人より聞いていた、釧路商人が派遣した2,3人の坑夫の採掘状況を実見した。次は、1871年に工部省が開坑し、約一年後に廃坑したOsot-sunai オソツナイ炭鉱を視察した。釧路で最高の炭田と言われているが、鉱床が北西へ20度程傾斜しているのが難点であった。当夜は、昆布森林で宿泊。小さな村にもかかわらず、人家の密集状況は札幌に次ぎ、砂浜に所狭しと昆布が干されている光景は壮観だった。

明るる日、Fushikokombumoriの石炭露頭を見て、うつ蒼として椴松林を抜けて浜へ下り、Todomappuに出て、^{ぽんとまり}浦雲泊の頁岩と石炭を調べ、Chipuran(^{ちがらんけうし}重蘭窟?)で昼食。ここから、使用人と荷物は舟で厚岸へ渡り、ライマンと秋山は、水路Beshakodomari炭鉱へ廻ることになった。数百フ

ィートの切立った岩壁、Shishamonaiの海際の大崖、Zempoji(仙鳳趾)と次々通過し、Beshakodomariに上陸、断崖、峡谷、丘陵地の炭層を調べた。

ライマンが訪れた白糠以東厚岸までの炭田の中では、オソツナイ炭坑が最も有望であるが、産出額は地方の要求を満たす位のものであろうと予想した。

調査後、帆を上げて湾を横ぎり、厚岸へ向かう間、東沿岸特有の濃霧が下りて、ライマンはスケッチができなかった。厚岸真近になると、霧のペールが殆ど消え、天然の良港厚岸湾の荒々しい岩肌が現れた。厚岸は、東蝦夷の要地と聞き、期待していたが、小さな村であった。しかし、新しい家が6軒建ち、店もあって活気に満ち溢れていた。

翌日曜日、一日休み、南部出身の厚岸本陣主人の故郷や根室の話を傾聴したり、村の末端の渡し場まで約2マイル散歩したり、アイヌの渡し守と雑談したり等、のんびりと過ごした。17日は、Ashirikotan 浜中へ前進。翌日は雨天で、出発を見合せた。前日、本陣で出された昼食が口にあわず、主に砂糖づけを食べた結果、ライマンは下痢に悩まされた。午後本陣の^{まおほかり}竿秤を借りて体重を計り、大津での体重との差を調べた。ライマンの体重は14貫目、ポンドにすると117ポンドで、「13才頃でさえ125ポンドを下らなかったし、インドでもこんなに少なくなかった」と、感想を漏らしている。蝦夷調査旅行の過酷さが思いやられる。

8月19日、ライマン、秋山および従者は、馬で海岸沿にOtchishi(^{おちいし}落石)を目指し、他の人々は、荷物と共に、アツウシベツ経由で、内陸の道を通り根室に向った。この旅路は楽ではあるが、崖岬、大岬、岩壁や太平洋の壮観を賞でることができない。

翌日、下痢が再発し、絶食して普段より遅れ、7時5分に宿を出ると、外は海霧で一面灰色の世界であった。フィールドブックのライマンの足跡を追うと、間もなく海上に仲よく並ぶ上部の平たい二島が浮ぶ。ユルリ島とモユルリ島である。次に根室境界の標柱を見たあと海を後にし、根室半島の疎林、熊笹道を通して10時23分根室着。アツウシベツを経由して来た一行も、2分程遅れて到着した。根室に來れば、誰でも国後島と択捉島を訪れたい好奇心にかりたてられる。ライマンも例外ではない。ケブロン号が根室湾に停泊しているのを見るや、早速午後船を訪れた。しかし船長は病気の上、汽船は

2, 3日で根室を離れるのを知り、ライマンは、渡航を断念せざるをえなかった。

2. ライマンの怒り・根室滞在

8月21日は、根室知事が表敬訪問し、ライマンへ多楽島産の美しいめづりを贈った。約一週間、下痢は一進一退、ライマンは、体に気遣いながら職務に専念した。体が回復した26日、突発的の事件が起こった。世に知られたライマン紛争の幕開けである。

当日のフィールドブックの最後は「6時頃、Hが札幌から松本へ傲慢な手紙を持って帰還してきた」とある。平素感情を表わさないライマンとしては、異例の書き方で“傲慢な”に、ライマンの怒りが凝縮されているのを感じる。Hとは通訳佐藤秀頭で、松本は大判官松本十郎、手許には英訳の手紙しかないの、少し長いが和文を、原田典著「お雇い外国人一開拓」から全文引用させていただく。

今般貴下我訳官佐藤御差戻同人申聞ニハ、貴下日本語能ク御話シ出来ニ付、此后御旅行中同人不用ニ付モンルー氏ノ連之参リ可申云々、乍然黒田君ノ事ハ（事シブゼクト〇意オブセクト、恐クハ長官公ノ意ハノ誤カ）全ク本使并ニ貴下ノ便利ヲ為スタメニ候間、貴下独断同人而已御差戻出来カタク候、貴下東京ニ在ル時大鳥氏ニ同人ヲ同伴セン事ヲ甚タ懇望シ、只今前ト反スル、何ノ故タル了解不致候

佐藤ヲ送ルノ利不利ハ特ニ我等カ権力ニアリ、素ヨリ貴下ノ之レニ関ラサル所タルベシ、故ニ再ヒ同人ヲ貴下ニ差送り申候、前条ノ意味篤ト御了解之レ望ム 謹言(注1)

次いで、ライマンが読んだ英訳松本書簡を引用する。

Satsporo 12th of 8th month
7th year of Meiji

Mr. Layman.

Dear sir:

This time you sent back our interpreter Satoo he told me that you do not need him hereafter during your traveling and to go to Mr. Munroe's party because you can speak Japanese well. But Mr. Kuroda's subject is entirely to make a convenience both of Kaitakushi and you. So you cannot judge yourself to sent back him alone. I am not understand that when you was at Tokei you wished to Mr. Ootori to accompany him very much why you are now will be contrary from before.

The benefit or unbenefit of sending Satoo is only our power of course you will not concern about it.

So I sent him back again to you. Hoping that you will be fully understand the above meaning.

Yours respectfully,
Mstsmoto Jiuro
Daihangun

英文と対照して読むと、和文の内容がはっきりし、また「事シブゼクト〇意オブセクト、恐クハ長官公ノ意ハノ誤カ」の不可解な部分が何となく判ってくる。But Mr. Kuroda's subject のサブジェクトはオブジェクトの意ではないかと逡巡した形跡と考えると、問題の英訳から和訳されたのではないかと、疑問が起る。

最近、ライマンが根室で受取った原文と筆者が引用した松本書簡が二通存在することが明らかになった。フィラデルフィアの米国哲学協会で原文を読まれた藤田文子教授は、「日本語の手紙は、佐藤はライマンのためでなく、“政府があなたの説明をよく知るために、黒田次官が同行を命じたことをよく理解してほしい”という趣旨の簡潔なものだった」と書かれている。(注2)

英訳の手紙には、ミススペリングがあり、文法の間違いが多く、英文は極めて稚拙で、公式文の品位が欠如し、読む人に不快感を与える。ライマンが不審を抱き、原文を日本人に読んでもらったのは、当然と言えよう。

すぐさま、ライマンは机に向かい、下書8枚を何度も直しながら、ケブロン宛に、開拓使への苦情を書いた。生々しい下書きを通し、当人の吐露する真情が、ひしひしと筆者の心に迫る。

初めに、ライマンは、日本人に読んでもらった原文がそれほど傲慢でないこと、また訳文に、原文がない部分がある事実を述べ、開拓使側の訳者が英語に非常に無知であり、誤解したとして、それ以上追求非難はしていない。

彼が最も抗議したかったのは、彼の下に働く助手の監督権が自分にあるとの信念で、これには進退を賭けた。監督権を持たない指導者に、如何なる仕事か期待できようか？ というのがライマンの信念であった。ライマンは、契約書には示されていないが、彼に助手への監督権があるのは自明な事であ

り、文明国に於いて、この監督権を否定する法廷はありえないと、憤然と言放った。

ここで、リチャード・H・ブランドンが書いた、明治政府がとったお雇い外国人に対する態度について語りたい。ブランドンは英国人で、1867年から1976年まで日本に滞在し、日本の灯台建設に貢献したエンジニアである。彼によると、雇主である日本政府の下で働くお雇い外国人には2つのタイプがあった。第一のタイプは、事勿れ主義で、ただ契約期間を無事に終ればよいとするものであった。大多数のお雇い外国人は、このタイプで、日本人雇主とはうまくいったが、結果的には日本政府に汚職や腐敗をもたらした。もう一つのタイプは、ブランドンやライマンに代表される、自分がたてたプランを責任を持って実行する人びとである。ブランドンは、「しかしこのようなやり方は、命ぜられた仕事を、その者のアイディアにしたがってあくまでも遂行しようとするから、摩擦を起こし、日本人との人間関係が不和となることはまず確かである。」(注3)と述べている。ライマンの経験とぴったり符合するではないか！ブランドンも彼の仕事の指揮および監督権を敢然と主張し、9年間工部省の役人の下で、辛酸をなめた。彼は、大事業が成功したのは、少数であるが、思慮深く、理想を持ち、良心的で、寛大なサムライが日本政府の上部にいたからだ感謝の意を表明している。サムライとは、大隈重信・伊藤博文・寺島宗則・佐野常民で、特に佐野を、真のサムライと激賞した。補足すると、11月15日付のケプロンへの手紙で、黒田は、ライマンの助手達への監督権を認めたが、人事は開拓使にあることを明らかにし、ライマン紛争に終止符を打った。

ライマンの、佐藤の職務についての記述によると、最初から、開拓使と意見の相違があった。読者は、7月13日、いよいよ上川盆地横断への出発の日、ライマンが総員の一人として「通訳(地質補助代理・植物採集係)」と書いているのを覚えていられるであろうか？(本誌476号)ライマンは、ケプロンへの「私は、日本語がうまく話せると言っていない。しかし開拓使がよく承知しているように、一年以上通訳なしで調査を無事にやってきた。札幌出立以来、佐藤とは英語で話はしていない」と述べている。自分は通訳なしでもすませると判断し、大津

から東、さらに北上する旅は、主に海沿いの調査なので、佐藤の植物採集の役目は益々減少していくとの判断で、ヤンキー特有の、無駄を省く合理主義に基き処置したのだ。個人的な問題でないのが、次の文でわかる。「佐藤はこれ以上開拓使の上司と争ったり、自分と不和を起したくないだろうから、彼と旅を続行してもよい。彼は、知性ある若者が喜ぶ未知の国の旅をエンジョイするだろうし、私も多くの点で、楽しい旅の道づれを持つことになるだろう」。一気に書き上げた下書の文だけに、佐藤への思い遣りは、ライマンの本心である。しかし、この期待を裏切り、彼と佐藤の溝は次第に深まり、悪化して行く。

翌8月27日、ライマンは、7日ぶりに秋山を伴って調査に出かけた。毎回、フィールドブックに、几帳面に時刻を記入しているのだが、この朝に限って、時の記録がない。筆者の眼前に浮ぶのは、朝まだき、両者が黙々として、荒蕩たる世界を疾駆する姿である。ライマンは、彼の憤り、憂い、孤独感を振り落とさんばかりに、根室半島最東端へと、矢羽の様に駆け続けたであろう。荒涼たる景色の中から、突然、納沙布岬最先端にある灯台が姿を現わした。六角形の灯台は、清潔で、手入れが行き届き、大きなランプが輝いていた。灯台守夫婦と使用人一人が居住するが、8月15日から5月15日までは灯台は閉鎖される。ここで一行は昼食をとり、厚いもてなしを受けた。望遠鏡で、樹木のない、低い平たい水晶島や多楽島を眺めた。根室の知事によると、行きは良くても、帰りは海峡の強い潮流のため、一週間はかかると聞き、ライマンはすでに両島行きを断念していた。帰路は、穂香ほのかに寄って、根室へ戻った。未だ全快しない身ではあったが、久しぶりに、30マイルの長距離を駆馳し、苦悩を忘却の彼方へ押しやったであろうと推察したい。

3. 秘境知床半島、根室一斜里(8月29日—9月12日)

暴風雨で一日遅れ、29日に根室を離れた。風蓮湖あたりから、旅の舞台ががらりと変化し、最果ての地に足を踏入れた感が一入であった。風蓮湖岸のアツウンベツに6時15分到着。本陣はあまり清潔とは言えず、ほころびた蚊帳へ侵入する蚊の群に悩まされ、ライマンは眠れぬ夜を送った。翌朝5時

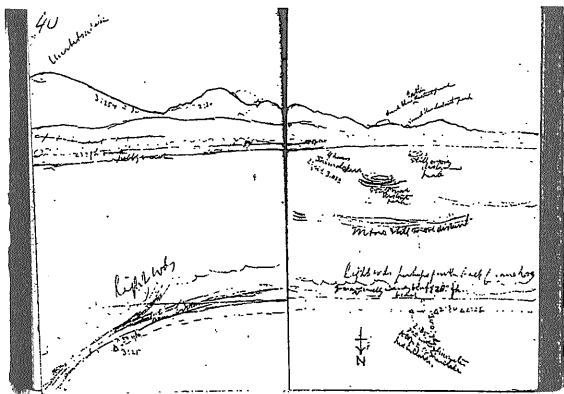
50分アツウシベツ本陣を逃げるようにして立ち、すぐ近くのフェリーで対岸へ渡り、次いで西別で再びフェリーに乗って、別海に7時20分に到達した。ここで、昨夜の疲れを充分にいやすことができた。

8月末日、絶えず海寄りの道を進み、昼前に標津に達し、本陣で何時もの通通知床半島を中心とした情報を集めた。旅程情報は、フィールドブックに標津—Uembet馬で4里、RaushiからOnsen 1 1/2里山路、Raushi岬の最端、15 1/2里などと書かれていて、始めは判じ物を読んでいるようだったが、岬は野付岬でなく、知床とわかると、植別、羅臼も確認でき、温泉とは瀬石にあたと芋づる式に漢字が飛び出してきた。これらの情報と忠類の砂金の話から判断して、ライマンは、北上するものとらんだが、的がはずれ、翌9月1日、一行は内陸へと向った。

根室知床は、道らしい道が無く、人の行きかきも稀で、泊る宿は荒れ果て、その上天気は荒れ模様が続く季節に入っており、内陸の道を選んだのは賢明であった。約19マイルの荒れた道を通して、チライワタラに4時20分に着いた。宿はぽつんと立った一軒家で、今後の旅のきびしさを暗示するかにみえた。この日ライマンは、佐藤にケブロンへの報文の清書を頼み、断られた。「自分の職務は、開拓使通訳と翻訳者で、ライマンの助手でも筆耕人でもない。それ以外に、仕事を手伝う場合は、全く自分が望むからである」と書いた佐藤の陳述書が残っている。

明るる朝、8時32分チライワタラを出発し、雨雲の下、西北西へ進んだ。途中本道をそれて、Paushibets温泉、次いで標別温泉を調査した。5時55分に若老に到着するまで、出会ったのは、根室からの日本人温泉逗留者一人、鹿、熊のみで、想像を絶する僻地だった。

3日は、雨で宿に留まり、翌日、若老が山地にあって雨量が多いのを知り、雲が低くたれこめた空を気にしながらも、斜里へ向った。1時過ぎ、Kamuinibira?で、古い休憩所に幕を張りめぐらし、ライマン一行を接待しようと、2,3人の日本人とアイヌ達が待ち受けていたが、ライマンだけは天気を案じ、目的地へ急いだ。朽ちた人家や小屋を過ぎ、雨の中、低湿地を通過、割った丸太を縦に敷いた道を、滑らぬよう、疲れた馬を注意して走らせ、3時



第2図 硫黄山(Itashiboni sulphur mines)調査舟旅途上。
(以下、マサチューセッツ大学図書館 スペシャルコレクションズ ライマンコレクション蔵)

58分斜里本陣に入った。灰色のオホーツク海が眼前に広がった時、ライマンの感慨は如何であっただろうか？ 宿は、紺と白の縞を張り、ライマン一行を歓迎した。僻遠の地での旅人はきわめて少なく、外人の接待には不慣れであったが、古い流儀での大へん礼儀正しいもてなしだったと、ライマンは、好印象を受けたようだ。

9月5日北見知床硫黄山への調査旅行は、舟旅から始まる。ライマンは、潮が満ちるのを待つ間に報文5ページを清書、9時50分に、いよいよ本陣を出て舟人となった。しかしすぐ舟は砂州に乗り上げ、押しても、曳いても、微動だにもせず、立往生した。2時の満潮を待たず、メッセンジャーを岸へ送って援助を求めた。今回の調査行は、なるべく人員を減らし、ライマン・秋山・ボーイ野村・コック・日本人人夫の浅と竹、それにアイヌ10人、その中に3人の若い女性が含まれ、後は船頭2人からなる。間もなくこれも若い女性を交えたアイヌの小型救助舟がやってきて、無事に砂州から大舟を脱出させた。1時半過ぎ、遂に出発。海面はおだやかで、風は軟風、快適な舟旅であったのが想像できる。斜里から3里のHorotomari(ポロトマリ?)に4時15分着。船頭達がこの先3里内に、停泊するのに良い場所なしと言うので、番屋で一泊することになった。

翌朝、6時30分出帆。しばらく櫓に頼ったが、間もなく風が立ち、マストに大きなぼろのござの帆を上げて進んだが、再び凧となり、櫓に戻った。次第に広い砂浜が消えて岩石に変じ、陸地は高くなり、断崖絶壁、遠方の山頂が視界に入ってきて、周辺

は、いかつい容相を呈し始めた。Horotomari から6里のUtorutsukusi(宇登呂?)に達し、舟を陸揚げして昼食。ここにアイヌ人家2軒があるが、鮭漁のオフシーズンで人影はなし。12時半過ぎ舟に戻り、Horobetsの古い番屋を通過、2時Yuwobets(岩尾別?)に着いた。その頃より、風速が早くなり、先2里圏内に上陸地点がないため、舟が海へ吹き流されるのを恐れ、再び船頭達は、ここで一泊するように主張した。案の定、疾風が起り、テントに重い石を置いて、気もそぞろの一夜を過ごした。

早朝、衰えぬ強風をさけて、砂浜西端の海岸近くにテントを移動し、風が治まるまで、ライマンは、岩石調査に時を過ごした。昼食後、舟を下して出立、2時間後の3時25分に舟旅の終点カムイベツに到着した。アイヌガイドに、露営する場所は、海岸と硫黄山間ではここ以外にないと言われ、寸暇を惜しむライマンは、今回も経験者の意見に従った。

9月8日、6時30分頃、ライマンと秋山は、調査助手の日本人足2人、アイヌガイド、弁当・毛布等の荷持ちのアイヌ人1人を引連れ、徒歩で硫黄山へ向った。アイヌ2人は、日本式ジョッキ・水差を携帯したとある。筆者は読みながら直に、ひさごと推測したが、果たして、後で、ガイドが一休みと腰を下し、大石によりかかった途端、「ぱちり」と割れて、瞬く間にジョッキー杯の水は無くなったと記している。硫黄山は、カムイ川に並行した土地にあって距離はそれ程ないが、断崖にはばまれて遠回りする外はない。さらに、ガイドが道に迷って、尾根、山峡をさまよい歩き、苦難の末、疲れ果て、11時過ぎ、やっと硫黄川に出た。ライマンは、早速屈んで、川水を飲んだが、酢のように酸っぱく、飲料水にはならない。瀧、温泉、冷泉、すべて液体は酸味が強い。惜しげもなく飲んだひさごの残りの水は、金にも価するものとなった。

一行は、硫黄山山頂への途中、硫黄が流出する穴を発見し、その異観に驚嘆した。堆積した硫黄の間に、おそらく直径約百フィート、深さ30フィートの大穴があり、底に、多分縦20フィート、巾15フィートの小穴が存在し、そこから熔融した硫黄が沸き立ち、激しく地を揺動かしながら湧出し、四散したガスは、視界をさえぎる。ガスは、穴から流出するや、硫黄粉末と化し、広範囲へ飛散する。見渡す限りの約8エーカー(946百坪)の地上は、すべて硫

黄で、全員、壮大な光景に、しばらく釘づけとなってしまう。

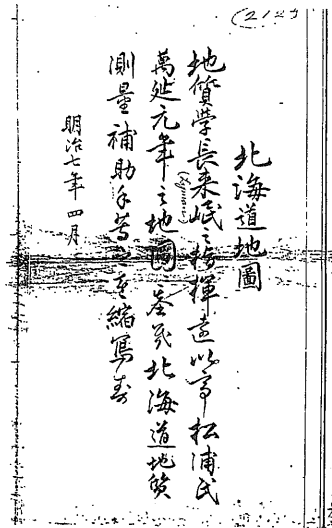
風下の丘陵側で昼食した後、ライマンは秋山と共に、硫黄鉱床の調査をし、硫黄・岩石のサンプルを収集した。帰路は、旧道を通り楽にキャンプ地へ戻った。

翌朝、波浪高く、舟行不能で、ライマンは、舟旅が数日遅延するのではないかと危惧し、斜里へは陸路で戻ることにした。一日でUtorutsukushiまで、次の日は斜里までを予定し、ともかく3日分の食料を用意した。人足用の大テントと必要でない物は舟に残し、日本人船頭一人と病むアイヌ一人に後事を託し、各人重い荷物を担ぎ、9時半過ぎキャンプ地を立った。1マイルの海辺道の後には、急峻な丘陵、高い竹やぶ、深い沼地、続く山頂等、困難が待ち構えていた。行けどもYuwobetsは見えず、肩の荷物は重みを増し、歩みは遅々として進まず、昼食をとるつもりでいたYuwobetsに着いたのは6時40分。夕闇は迫り、全員疲労困ぱい、ここで一夜を過ごすことになった。

10日朝、炊飯は鍋一つなので、朝食に時間がわかり、8時過ぎ出発。昨日と異なり、アイヌ達は、土地を熟知していたので、至って快調に進み、正午には、Horobets川口に達した。Utorutsukushiを近くに眺めながら昼食。うねりは、すでに納まり、海上に鮭漁シーズン開始を待機する数艘の舟を認めた。ライマンは、予定を変更し、日本人船頭とアイヌこぎ手5人(全員男性)を連れて海路遠音別まで行くことにした。他のアイヌ達は、「鮭漁シーズン来れり」と心忙しく、急ぎKamuibetsの舟へ戻る支度を始めた。5時37分に遠音別に到着し、アイヌコタンと川を隔てた砂浜にテントを張った。先ずアイヌの若者が川を渡って、火種用の付け木を持ってやってきてくれ、続いて2,3人のアイヌがテント作りを手伝ってくれ、一行を歓迎してくれた。

9月11日、風はほとんどない日中で、舟は6時55分遠音別の岸を離れた。8時20分、岸に立っている一人のアイヌから進行中の舟へ、「昨夜秋山がSakibure(先触れ)で頼んだ馬が、Horotomari番屋で待っている」との連絡があった。Horotomariに9時30分着。ライマンと秋山は馬に乗り10時10分出発し、斜里本陣へは11時25分に着いた。

根室・日高の奥地の旅行中、ライマンはアイヌと



第3図 ライマンが調査に用いた北海道地図

接する機会が増え、その実情を身近かに見聞きした。そして将来開拓使がアイヌ政策と取組まなければならないことを予感し、怠りなくアイヌを観察し、それを記録に残した。その中の二つを紹介しよう。

ライマンは、江戸で、アイヌが狩猟地域にある鉱物資源を隠べいしているとする話を耳にしたが、彼の経験ではそんなことはなく、親しくなると、取るに足らない鉱物でさえ、自分達が価値あると思ったものに、ライマンの注意を喚起しようとした。もう一つの話は、別海での出来事である。8月30日早朝、眠れぬ夜を過ごしたライマンは、アツウシベツから逃げる様にして、唯一人、渡し舟で別海へ渡った。予想以上に早く別海に着いたので、側の日本人少年に「ここは、別海ですか?」と尋ねた。途端に、舟の片端にいたアイヌの男が、ぱっと首を川の中へ突込んだ。彼の生れ育った土地を、一目で別海とわからない人がいるとは笑止千万、と腹の底から出る笑いをこらえようとした揚句のことだったのである。ライマンは、単独でフェリーに乗ったからこそ、大自然に生きる大らかな、しかも思いやりあるアイヌの哄笑を押えたシーンを目撃できたと、思いがけない幸運を大いに喜んだ。両者の善意が、筆者の心を打つ。

4. 北辺の旅：網走(9月12日)―宗谷(9月25日)

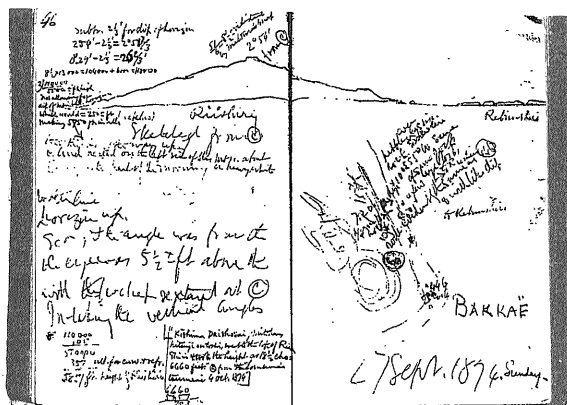
役所、アイヌ住居20軒、倉庫6軒。なかなかの

にぎわいの網走の本陣は、真新しく、清潔で、ライマンを喜ばせた。もう一日だけ滞在したい誘惑を退けて、9月13日、日曜日、常呂へ立った。斜里からの駅馬をいたわり、荷と共に舟で目的地へ送った。網走川をフェリーで渡り、振向くと、知床半島が海に浮び、峻岳・連山の雄姿が眺望され、ライマンは早速ポケット六分儀でチャチャスプリ(羅臼岳)やUnabetsudake(海別岳)山頂の高度を測定した。昨日と同じく、一直線で単調な砂浜、時々雑草が繁る砂丘があり、遠方に、ちらほらと森が見える。10時12分、大湖とあるのは能取湖だ。全く荒涼とした、無人のオホーツク海岸沿いの道を駆馳するライマンの姿が黒点となって、筆者の眼前に現れた。常呂11時30分着。悪天候の為、もう一日余儀なくされた。本陣は薄汚なく、サービスが悪い上、ライマンの部屋は雨漏りがあまりにひどいので、秋山と佐藤は彼等の部屋を提供した。

翌15日、常呂7時25分出発。片側は海、片側は荒草砂丘の眺めが、間もなく大湖に変じた。サロマ湖である。大湖が消えると、再び海と砂丘の世界に戻った。やがて海音が真近に聞える湧別本陣へ12時10分に到達した。一行は清潔で丁寧なサービスを受けたが、さびれた宿、3,4軒の人家だけの村の一夜は、誰もが無性に寂寥を感じたであろうと想像される。

翌日、湧別を出て、海と湖水群の間を進んで行くうちに雨が降り出し、雨の中を紋別村入りした。本陣は、壁紙がはられ、良質の家具が並び、豪勢だった。紋別が北見の中心であるからであろう? ライマンの部屋には、毛布がかかった薄板で作った2つのアームチェア、粗毛絨毯で覆われた大きなテーブル、腰掛用にと2つの黒い旅行箱(長持?)が堂々と並べられていた。この部屋で、前章に述べた「日本蝦夷地質要畧之図」を発想した。次の日、雨が降り止まず、ライマンは本陣で蝦夷地図作成中、色刷全島地質図を作る着想を抱く。9月17日は、彼の人生で、忘れられない日となった。

9月18日から23日までの6日間、沢木(雨天のため2晩過ごす)。Chikabutomushi(チカブトムシ)、枝幸・斜内・猿払と約93マイル旅し、克明な地質調査記録を残した。枝幸では、これまでで最高の持てなしを受けた。しかし、フィールドブックの蕭条としたオホーツク海沿岸の長旅を読むとライマンの



第4図 利尻島スケッチ

焦燥を感じるのは、筆者の思い過ぎだろうか？

翌24日、猿払宿すぐ側の川岸からフェリーで宗谷に向ったが、雨で目的を達せず、Chietomai(杖苦内)泊りとなった。今日こそは宗谷と意気込んだ朝、シーズン最初の白霜が下りた。あと一里のところで一変して荒天。宗谷は、ライマン一行を、強雨・雷・稲光で迎えた。宗谷村は根室よりずっと小さかったが、樺太への渡口だけに、数多くの人家や倉庫、また新しい神社が建っていて、活力あふれていた。午後、Karafto 南端に住んだ経験のある二人の商人を捜し出し、ライマンは、熱心に樺太の地質について質問し、夜は夜で、宗谷知事の樺太、利尻島の岩石、宗谷海流等々の話に耳を傾けた。

5. 日本海の荒波：抜海(9月26日)一小樽内(10月15日)

宗谷から Bakkae(抜海)まで8里29町の旅路を行く一行と別れ、ライマンは、秋山と佐藤を伴い、声問を経て野寒布岬を廻ったので、11里以上かかった。抜海に着くと、礼文島と利尻島が真近に見え、彼は、早速前者をスケッチした(第4図)。

翌27日、日曜日、疲れ切った馬を励まし、天塩へと進んだ。単調な風景の中で、壮大な利尻岳の姿がライマンを慰めた。天塩では、村山知事の訪問を受けた。石橋が発見した天塩川上流の石炭、焼尻を含むこの地方の岩石、鮭漁が主な話題であった。

28日、雷雨のため出発を延期。翌日、村山知事の情報により、天塩上流の石炭を調査する必要なしと判断して風連別へと立った。波浪が高い海浜を避けて山路へ入ったが、裏目に出て、約3里の道を、

穴や溝をよけて、四苦八苦しながら前進した。ちなみに、草に覆われた穴の深さは、落ち込んだ馬の肩までであった。風連別の宿で、2月28日以後30日間続いた地震の爪痕と分かった。昨日と同じように、フィールドブックに「今日も煙は見えず」と記しているのは、利尻岳の煙を意味する。

9月末日、風連別を7時過ぎに出発して、苦前に1時59分に着いた。途中、数多くの貝の化石、とくにかきの貝殻を見つけて採集した。また宗谷以来、全くなかった昆布、わずかだった海藻が急に増えてきた。苦前知事が Yakunin を連れてライマンを訪問した。「人家はアイヌ住居を含めて80軒。Yageshiri(焼尻)・Teshiri(天売)両島は12軒。鮭の収穫平均年三百石だが、一昨年は四百から五百石の大漁だった。苦前の主産物は鱈で、昆布は多くない。今年は降霜は未だない。大地震は2月に起きた」等の情報を知事からえた。知事は、地震が何日に起きたかかくわしく述べていないが、2月8日の樽前山大爆発と、何らかの関係があったのではなからうか？

暴れ回った暴風雨は、3日目、10月3日に弱まった。4日は日曜日で、天候は未だ納まらず、留萌炭山へ遡上する舟を Herashibets で待たねばならぬと予想し、出発をもう一日延した。調査に加わらない通訳は、この日苦前を後にした。彼は、ルルモッペ(留萌)で一行の帰りを待つ。利尻岳は、初雪の装いで清々しく、南に目を転ずれば、Ofuyudake(雄冬山?)も、頂に雪を被って、清浄な姿をみせた。

翌朝、霜を踏んでフェリーへ急いだ。Chashi 村で岩石や岩礁を調べ、ルルモッペ境界を越え、10時25分鬼鹿を過ぎ、2時に Herashibebuto に着いた。ライマン達は、渡し守の家に泊ることになった。落日前、ライマンは Ofuyudake と増手山の高度を計った。フィールドブックに、両島のスケッチが残っている。

10月6日、Herashibets 調査、いよいよ留萌炭山調査を開始した。一行はライマン・秋山・コック兼人足と船頭5人、計日本人7名とアイヌ人1名から成る。第一日は、7時36分、甚だしく蛇行したヘラシベツ川を遡上し、3里のところまで、薄暮が迫り、致し方なく、夥しい小石の岸边に小さなテントを張った。船頭達は、棹とござで器用に小屋を作って露宿した。第二日は、大霜が下り、5度の寒さ、



第5図 天塩日本海測地図(東西蝦夷山川地理取調図より)

舟が座礁する度に、裸で水中に入る船頭達の気迫に、ライマンは感心した。船頭は、川の操舟は不慣れで、運航は、遅々としてすまないだけでなく、急流で転覆したり、沈没の危険があったが、ともかく昨日と同じ3里を漕ぎ終えた。Otoitsukuchi川通過前後より、石炭を含む砂礫や、石炭層が現れ、当夜は、留萌炭山の真近でキャンプした。

澄んだ寒い夜が明ければ、霜は深く、温度は約2度、このあたりはもう冬季なのだ。先ず1886年に採掘して放棄した丘陵斜面の炭鉱を調査した後、2そうの舟と荷物を残し、軽舟で川を上り、留萌炭山中心部へ入った。1871年に採掘したが、産出量は少なく、ここも同年断念された。ライマンは、石炭を採掘するには土地条件があまりにもよくないので、これ以上調査を続行しても無駄とみて、昼食後帰途についた。帰路、舟は驚く程迅速に川を下り、1時40分には、2そうの舟が待つ分岐点へ、4時4分には、2日前に昼食した場所に達した。ここでライマンは、川堤に立つ大熊を目撃した。犬が熊へ挑もうとする緊張の一瞬、熊狩りの達人であるアイヌ

が、オールで舟の側面をたたいた。熊は音に驚いて逃げ、彼は低い口笛で犬を呼戻した。瞬間の出来事であったが、ライマンは母国の友達が口笛で犬を呼ぶシーンを思い出したのであろう、東西の習慣の類似に人間の共通性を見出し、感興を覚えたことを記している。留萌炭山の旅で、若い未熟な日本人の船頭が、遡行中困難に直面した時、アイヌの指揮に自然に従った姿も、ライマンの興味を引いた。「蝦夷地では、アイヌと日本人の間で、嫉妬や増悪を全く見なかった。」と彼は報文で述べている。

調査三日目の9日朝、珍しく霜の代りに、川一面、もやが立ちこめていた。6時45分出立。9月16日の紋別では秋の気配が感じられたが、今やたけなわ、紅葉を賞でながら、ライマン一行は、川を下った。9時23分に Okenai, 12時28分にヘランベツト、そこからすぐルモッペへ向った。3時24分留萌の宿に入った。

黄昏に、ライマン達は、ホテルの向い側の岸へ、鮭網漁を見に出かけた。丁度網を引上げている最中で、町の人々は老いも若きも大勢集り、その中に、6,7人のアイヌが交っている。若者達が高く掲げた葉がついたままの乾いた竹が燃え上がり、活気に満ちたシーンを照し出す。主に若者、アイヌの女が、ベルトコンベヤ式に活動する。網から鮭を取出し、腸を出した後、倉庫の入口まで運び、詠唱口調で大声で鮭をかぞえ、粗塩を大量にまき、倉庫にうずたかく積まれるまで、3分かかるぬ迅速な作業である。しかし菜食主義者のライマンは、鮭殺りく過程の見物より、秋山を慕って集って来た人々に、非常に関心を持った。監督幹部が、ライマンの群の中の秋山に気がつくと、挨拶しにやって来た。彼等の尊敬と喜びに満ちた顔！秋山は数年前までルモッペの知事だったのだ！ライマン達は皆、彼の過去の栄光をからかったが、秋山は終始にこにこして上ぎげんだった。「わあ、秋山さん、すごく偉かったですね。こんな風に、深いお辞儀をされていたでしょう」との声が聞こえるようだ。ライマンは、紳士的で、有能かつ高潔しかも多くの人から敬愛傾慕されている秋山が、どうして職を追われたのか、不思議に思われてならなかった。

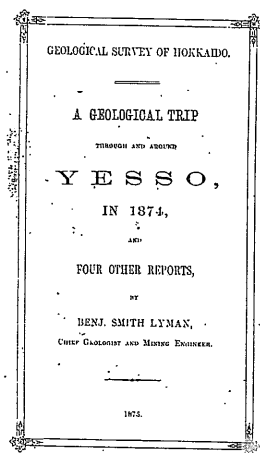
前夜は沛雨で、10日朝も雨雲が垂れ込めた状態であったが、8時45分に宿を出た。先に難路の雄冬山道がひかえている為、どうしても今日中に増毛ま

で行こうと途中から降り出した小雨の中を進んだ。11時過ぎ、Nobusha 川(信砂)へ。図の側に「松浦この川を渡り、雲龍川を経て、4日で石狩川へ(また、石狩川より海へ)。信砂川源近くに石炭を見出したが、炭床なし。④」と記入がある。④は秋山情報を表す。12時16分、無事についた増毛村は、ライマンに好印象を与えた。札幌を立てて以来、始めて学校が存在し、蝦夷で最高のホテルを有し、村民が外国人に対して好奇心を持つ、教育と文化の高い村だったからだ。

翌11日、雪で山道が閉ざされる前に、Mashikemountain(浜益岳?)を越えようと、急ぎ出発した。身を切るような寒風が吹き荒び、波高い海岸を避けて、すぐ増毛山地へ歩を進めた。始めは、海拔二千三百フィート、二千五百フィートと、だんだん高くなるが、起伏が多い。頂上では残雪を見た。荷を下ろして馬を辛うじて歩かせねばならない隘路、迂回を余儀なくさせられる獣道、骨身に沁みる寒い風に耐え、増毛を出発して以来、ライマンは、食事はおろか、休みさえとらず、自分だけ一足先に、5時に浜増毛に到達した。続いて、秋山と佐藤が6時37分、その他の人々と荷物は暗くなって到着した。

12日は暴風雨で、一日浜増毛に滞留した。難関濃屋山道の旅をひかえ、英気を養うよいチャンスであったに違いない。翌朝、荷は馬に頼らず担ぐことにしたので、荷物を再編成し、皆徒歩で、7時45分浜増毛を離れた。台風之余波で、激浪は浜を洗い、一行は断崖下を注意して行進した。村や谷間を通過、丘陵を登り降りし、浜増毛と厚田の中間、濃屋で昼食と小休息をした後、2時、いよいよ恐るべき濃屋山道に挑戦した。第一頂上3時20分、第二頂上3時38分、次の頂上4時3分、最後の最高峰4時17分と尾根伝いの強行軍であったが、案ずるより産むが易しで、6時15分、海辺の村に辿り着いた。すでに辺りは暗く、バロメータの数字は読めず、砂浜を馬で進むのに苦労した。散在している家の一軒からちょうちんを借用し、極度の疲労と空腹を押して、遂に10時、厚田の本陣入りを果たした。

14日、ライマンが、いつもの様に5時過ぎに起床すると、石狩旅行を共にした忠実なボーイと人足の一部が夜通し歩いて、丁度到着したところであった。こうして全員揃い、1時59分に厚田を立った。3時過ぎ、なつかしのドック、棧橋、倉庫が視界に



第6図 北海道1874調査報告書

入った。フェリーで渡ると石狩村、新しい建物が林立し、繁栄を誇っていた。

翌朝、通訳佐藤が昨日札幌へ逃亡したため、これまでの計画を変更することにした。山内へは石狩上流の旅が不可能になったこと、全員11月1日に函館へ集結するという内容の手紙を書いた。そして一向は小樽内へ向って歩をすすめた。銭函へは11時15分着。目的地近くでは、今月初めの暴風雨で道路が流され、馬で通れず、遠回りして、小樽内へ到達した。ここでは去年8月に泊った宿が廃業していたので宿泊できず、秋山は、ずいぶん宿を探したらしい。彼は、貧弱な宿を案内した男を殴る事件を起こし、開拓使解雇の誘因を作った。ようやく探し当てた宿に落ち着いたライマンは、当夜の殴打事件を知らず、報文72ページに訂正を入れ、また、ケブロンへ手紙を書いた。

6. 帰心：小樽内(10月16日)―函館(10月20日)

10月16日朝、ライマンは6時に起き、昨夜遅く札幌から戻った佐藤と会った。如何なる会話が取り交されたのであろうか？ 佐藤に和文を訂正させた72ページと、彼の逃亡前に渡していた24ページを足し、計96ページの報文および手紙をケブロンへ届けるよう頼むため、折から港に停泊中のケブロン号を訪ねた。半時間程船長と雑談し、一路、余市へ急いだ。余市本陣11時7分着。ここで一泊する予定だったが、函館に毎日郵便船が着くことをケブロン号で聞いて帰心をかきたてられたのか、ライマン

だけ6里先のルベシベへ行くことに決めた。皆に翌日岩内で落ち合うように言い残し、2時15分出発した。丘陵を通り、峠を越え、峡谷を踏破して、然別川が流れる盆地を横ぎり、ようやく8時10分、闇の中に一軒だけ立つルベシベの宿に到着した。余市残留組は、ライマンを追いかけ、秋山と佐藤は、ルベシベへあと半里のところまで追い付いたが、使用人と荷役の一隊は、悪路に難渋をきわめ、馬が進まなくなりましたので、ルベシベまで2里の処で一晩を過ごした。

17日、風は殆ど無く、空は碧色、一面に霜が下りて冷たい。ルベシベを離れると、山道は峠へ向い、峠から急降下すると、広い、なだらかな谷間となり、ライマン達は、12時6分岩内に達した。次いで1時6分、新しい馬に変え、岩内から茅澗へ行き、小樽内で受けとったケプロンの指令に従い、新しい疏水坑の位置を調べた。精密な茅澗地図が江戸にあるため、位置の指示は江戸へ帰ってからすることを約し、3 1/2 里の道を岩内へ戻った。久しぶりに、この日は、14里を旅した。

10月18日6時30分に岩内の宿を出てから、20日5時15分函館ナンバーワンの家に着くまでの約3日間、何かに取り憑かれたように、函館へ函館へと引付けられていくライマンの心情を、筆者は、手に取るように理解できる。6月17日札幌を出発してから4ヶ月、あと数日で旅が終ろうとした時、これまで抑制していた彼の文明生活への思慕が極限に達したのだ。

1日目は、去年通った雷電山から湯内に11時26分着、磯谷1時30分、Odashuts(歌乗)を過ぎ、3時間ばかり、馬を励まして、難路を突破し、山頂を三度越え、夜になって黒松内本陣に入った。2日目は、黒松内を6時39分に出立し、昨日と同じく悪路、山道を克服して長万部に12時30分着。ここで昼食と2時間の休憩をとって、馬をゆっくり休ませた。長万部・遊楽部間約8里を、1時間2里の速度で、馬を軽く走らせて6時50分遊楽部に着いたが、それから更に前進した。日は一日一日と短くなり、5時半過ぎると半月が空にかかる。月光の中を疲れ切った馬をしばらく引き、8時25分当日の目的地山越内へ無事到達した。最終日は、山越内を

7時10分に出て、落部・森・鷲の木を通り、今回の調査旅行では最長距離の17 1/2 里を馬を次つぎに変えて、走りに走らせた。森より間もなくして新道に変わり、峠の下2時30分、七飯を経て5時15分函館へゴールイン。なつかしのナンバーワン・ハウスで、マンロー・ディ・ベーマー(Boehmer 開拓使園芸作物主任)と会い、夕食を共にした。秋山は6時30分頃着き、使用人と荷物は翌日到着した。

フィールドブックは、10月23日で終わっている。ライマンは、10月24日に函館を出帆、10月27日に帰京した。彼は、北海道調査に満足したようだ。一例を挙げると、根室から函館まで、53日、819マイル(326.6里)、1日平均15.45マイル(6.18里)、騎行は1日16.80マイル(6.72里)で、騎兵や鉄道馬車の平均走行記録より早いと報文では述べている。悪路、鉱石蒐集、測量等の活動を考慮に入れれば、この約4ヶ月間の調査は、正しく、プリンスにふさわしい卓越せる業であった。

北海道調査は、ライマンの働き盛り(37才-39才)に行われ、彼の人生のピークであったと言えよう。日本蝦夷地質要略之図は、彼の名を不滅のものとした。それだけではない。ライマンが日本を去ってから、彼の助手達は、日本石炭鉱業隆盛期の担い手となった。山際永吾・島田純一は、明治13年に幾春別炭田を、明治21年には、坂市太郎が夕張大炭田を発見した。これは、ライマンの北海道調査が、単に彼だけの調査で終わったのではないことを物語っている。技術は絶えず進歩し、古い技術は捨て去られるが、人間の高邁な精神は不朽であると痛感するのは、筆者一人だけではないであろう。

注

- 1) 原田一典(1975): お雇い外国人—開拓。鹿島出版, p. 162
- 2) 藤田文子(1993): 北海道を開拓したアメリカ人, 新潮社, p. 80.
- 3) リチャード・H. ブラントン(徳力真太郎訳)(1986): お雇い外人の見た近代日本。講談社, p. 169-170.

FUKUMI Yasuko (1995): A note on Lyman (11)—Geological survey in Hokkaido (II).

<受付: 1994年10月21日>